

★齋藤修一郎の英文自伝（部分）

資料 5 :

1. 史料の内容と所在

この自伝は、ラトガース大学 Rutgers University のアレキサンダー図書館 Alexander Library が所蔵する、グリフィス・コレクション The William Elliot Griffis collection の中の、生徒作文 Student Essays 319 編の第 20 編目の作品で、署名は Edward。Edward の伝記を第三者が書くという他の生徒の自伝とは異なる興味深い形の文章である。

自伝は表紙 1 枚を含めて 8 枚の洋紙に書かれており、内容としては、Ⅰ：幼少期－父母との別れ（約 2 ページ）・Ⅱ：沼津時代－武生騒動と大学南校へ（約 1 ページ半）・Ⅲ：大学南校時代－大学改革運動（約 1 ページ）・Ⅳ：英学学習による人生観・世界観の変化－西洋との出会いとその衝撃（約 2 ページ）・Ⅴ：法学を志した理由－外交への関心（約半ページ）の五つの内容に分かれている。

表紙：

To the request of Professor W.E.Griffis from his faithful pupil Edward. Kaisei Gakko.
Tokio Japan. March 1874.

W.E.グリフィス教授の要請に応じて、彼の忠実な生徒エドワードより。開成学校 東京 日本 1874 年 3 月

Ⅳ：西洋との出会いとその衝撃－英学学習による人生観・世界観の変化

続いて、東京に出てきて、英語で西洋の学問をすることを通じて、大きく人生観や世界観が変わったことを述べている。ここは修一郎の人生を考える時、とても興味深いことが語られている。

1) 武生時代の立身出世に囚われた人生観からの転換

Besides, while he was in his native town, having been connected by a strong tie of feudalism, that is **【was】** the relation between the lords and the subjects, and having thought that the foreigners, of whom very little was known at least to him, are **【were】** more barbarians of unhuman **【inhuman】** and cruel dispositions, indeed, he said, like a frog in a well, there was no occasion offered to him to understand the importance of trade and commerce, nor the necessity to be intelligent in the matters of business, because he and I think **【thought】** almost all others at that period of time, fancied that their rice income is **【was】** a thing to be perpetual and upon that they can **【could】** live without any work but fencing and searching something in the books of **【the Chinese classics and histories.】** **【】**内は訂正部分

また一方、彼が生まれた町に居る間は、封建制度の強い絆でつながれており、それは、領主と家臣との間の関係であった。そしてこの時、彼は外国人についてはほとんど何も知らなかったのだが、外国人は、非人間的で容赦の無い性格の野蛮人であると考えていた。本当に、井の中の蛙のようであったと、彼が言うように、そこでは彼には、貿易や取引の重要性や、ビジネスの問題で知的になることの必要性を理解する機会が提供されなかった。なぜならば、彼や私、そしてその当時の他の多くの者たちは、彼らの米による収入は永遠であり、彼らは、剣をとることと（中国の古典や歴史の）書物の中から何事かを探す仕事をして生きていくことができるものだと思っていたからだ。

（全文は、東日本英学史学会研究紀要「東日本英学史研究 第 11 号」2012 年 3 月刊 参照）